

た。

三四

ある日、吳葉がにこにこしながら入つて來た。

『たうとう参りました……』

『……』

窀子は谷に臨んだ坊の室で、涼しい麻の裳ばかりを着て机に向つて歌の本を讀んでゐるが、いくらか
いぶかるやうな顔つきで、急いで此方へと入つて來た吳葉の方を見た。

『殿から……』

『あ……さう……』かう言つて窀子はその消息を入れた文箱を受取つた。

かの女は別にうれしいといふやうな表情は見せなかつた。しかもそれを手にするとそのままその消息
を取り出して、それをすぐひろげた。すらすらと讀んで行くのが此方に坐つて控へてゐる吳葉にも氣持
好く感じられた。

讀みおはるのを待つて、

『別に、おかはりはござりませぬのですか？』

『お前の言つた通り……あまり長くなる……道綱も退屈してゐるだらう……もう歸つて來いッて書い
てあるよ』窀子はそれを巻き收めつゝ笑ひながら言つた。

『それはさやうでございませうとも……殿だとて、お待ちかねでいらつしやるには違ひありませぬ……』

『やつぱり道綱はしばらく見ないでゐると、逢ひたうならるると見える……』

『それはさうでございませうとも……』吳葉はかう言つたけれども、にこにここと別なことを考へなが
ら、『それに、何と申しても、眞心と申すものは、最後の勝利者でございますから……』

『……』

『何處に行つたつて、こちらのやうな眞心を持つたものはございせんから……』

『何うだかわからないね。こつちにだつて、そんなものは持合せてゐるか何うかわからないよ……』

『あんなことを仰しやる！』

『だつて、さうは思はない？ いくら此方が眞心を持つてゐても、向うでさうでなければ、さういつ
までもその心を持つてゐることは出来なくなるのではない？ やつぱりそれはお互ひのことではない……
……？ それはね、その間に何も起つて來なければ好い。誘惑が起つて來なければ好い。しかしさういふ
時には、得てさういふ誘惑が起つて來るものだからね。さういふ情に薄い一方の人に比べて、一方の人

は實際以上に情に深いやうに見えるのが慣はしだからね……』

『でも……この間、法華經のお話をうかッひました。そら、一つの心を固く持つてゐて動かない？ さういふお話をうかッひました……。あれとは違ふのでございますか？』

『……………』

窈子はびたりとそこに行きつまつて了つた。暫くだまつてゐたがやがて笑ひながら、

『お前、よく覚えてゐるたね』

『だつて好い話だと思つて心に銘してをりましたのですもの……』

『それにつけても、その一心を持つといふことは難かしいことなんだね。お話できけば、わけはないことだけでも、實際にそれを行ふといふことになるよ、大變なことなんだね……。今、考へた——お前に言はれて考へた。それはさういふ兩方を比べる心持などとは非常に違つてゐるのだッていふことを。もつともつとずつと先きのことなんだね。すぐそんな風に報酬的に考へるやうな心持では、とてもその境地に達することは出来ないのだね……』

『さやうでございませうか？』

『あ、お前に言はれて、好いことを考へた——一言の師と言ふことがあるが、お前はそれだ！』

『そんなことはございませんけど……』

『たしかに、さうだ……。お前がそれを言つて呉れないと、その一心を把持するといふ心持が非常に小さくなつて了ふところだつた……』

そこにまた足音が几帳のかげでして、可愛い雛僧が入つて來た。

『あの使のものが待つてをりますが——お返り言がございませうのでございませうかッて？』

『あ！ すつかり、こつちの話にまぎれて了つた——今すぐ御返事を上げますからッて』

かう言つて窈子は傍に置いてある机に向つた。

暫くして出來た返事をもとの文箱に入れてそのまゝ、吳葉にもたせてやつた。窈子は猶ほじつとして坐つてゐた。下では水の音が靜かに靜かにきこえてゐた。窈子はその一心の把持といふことと報酬的な心持との矛盾を長い長い間深く深く考へてゐた。

不意にあることがかの女の頭の上つて來た。『さうだ、さうだ……その一心の把持といふ言葉の中には、その報酬的な心持が何階も何階も階級を成してゐるのだ……。いゝえ、さうしてつらい報酬的な瞋恚に何遍も何遍も燃え上つたればこそその一心の把持といふ言葉が出て來たのだ……。佛は何遍も何遍もさうした心を通過して、そしてあの言葉を言はれたのだ——』
 尠くとも今までの心の境地とは丸で違つた心持がそこに展けられて來たやうな氣がした。かの女は言ふに言はれない歡喜を感じた。

ある日は道綱とかをると窠子と三人で出かけた。何でも谷の奥の方に一軒尼寺があつて、そのあるじは老尼だが、その弟子に歌をよむ若い尼があるといふので、果してそこまで行かれるか何うかわからないが、兎に角散歩に出かけて行つて見ようといふことになつた。

路は始めはその谷川に添つて奥へ奥へと入つて行つた。杜鵑が頻りに啼き、いろいろな花が草藪の中に雜つて咲いた。

道綱は行く行く阜斯などを追懸けた。到るところに蟬が鳴いてゐるので——時にはすぐ手近かなところにとまつて、人間の子供なんか馬鹿にでもしてゐるやうに啼いてゐるので、何故蟬を取る袋を持つて來なかつたらうと道綱は後悔した。『だつて母者がわりいんだ……蟬なんか取つてゐる間はないなんて言ふんだもの……それそれ、あそこにミンミン蟬がゐた……』かう言つて地團太を踏んで、しまひにはさもさもなくやしさうに礫をそれに打突けた。蟬は不意の襲撃にさも驚いたもののやうに、シュツと言つてそして飛んで遁けた。

『つまらないなア……本當につまらないなア!』

道綱が言ひつゝけた。

『つまらなきやお歸んなさいな……蟬なんか取りにつれて來たんぢやありません!』

『だつて、あんなにゐるんだもの』

こんなことを言つてゐると思ふと、二三步先きに歩いてゐるたかをるがキャツと言つて夥しく聲を立てた。驚いてそつちを見ると、さう大して大きいといふほどではないが、いくらか赤い斑を見せた三尺ぐらゐの蛇が、するすると路から草原の中へと入つて行くのだつた。

『や、くちなは!』

道綱は別に怖いとも思はずに、却つてその草原へとそのあとを追つて行つた。

『こら、およしつたら……。本當に、此頃、この子が言ふことをきかなくなつたねえ! もし、わるいくちなはでもあつたら何うするんです——』

道綱は路傍に生えてゐる篠竹を折つて、それを鞭のやうにして、まだそこいらに蛇がゐるはしないか、るたら、今度こそ遁がさないと言つたやうに草原の中を打ちつゝ先に立つた。

『本當に、何うしてこんなないたづらになつたか……。とても、これでは殿上など出來はしない……!』
誰に言ふともなく窠子が言ふと、

『大丈夫ですねえ……。父君がついてゐますね。何んなにでも好くして呉れますねえ!』

傍からかゝるが道綱に向つて言ふやうにして言つた。

『伯母者、さつきのくちなはびつくりした?』

『びつくりしたにも何にも……伯母者ふるえ上つた……』

『今度、出たら、鷹が生かしては置かない……』

『鷹はきついな』

こんなことを言ひながら三人は山の岨のやうなところを通つて行つた。

向うから重さうに粗朶を負うて女がひとり下りて來た。

かゝるはそれにきいた。

『尼寺は?』

『尼寺かな……。もうぢきだ……。この林を越すと、もう見えるだ。若い方の尼さん、つい、そこに

出てるたつけ……』

『まだ十町ぐらゐあるかね?』

『そないあるもんか……』

こんなことを言つてすれ違つて行つたが、少し行つて窀子が振返つた時には、その女がその背負つた粗朶をそこに下して、じつと立ちつくしてこつちを見送つてゐるのを目にした。

『あゝいふ人にも楽しみといふものはあるんでせうね?』

これはかゝるだ。

『それは同じことよ。家にはちやんと立派な男子がひとりゐて、あゝして里に出て粗朶を賣つて來るのを待つてゐるのよ。あなたと同じやうに男子に可愛がられてゐるのよ』

『まア、あのやうなことを——』

『あの粗朶を賣つて、歸りには酒を買うて來る……それを居爐裏の側で男の子が待つてゐる。さういふ生活もこの身には羨ましい……』

『結局、のんきで好いには好いでせうね!』

『こら、こら! そんなところに行つてはいけません!』ちよつと窀子が眼を離してゐる間に、道綱はずつと向うの方へと行つて崖の上見たいなところで頻りに松蟲か何かを捜してゐるのであつた。

『本當にしやうがないねえ!』

『鷹!』

かゝるも呼んだ。

『もう、行つて了ひますよ』

そしてかれ等は林の中へと路を取つて行くと、やがてその尼寺の屋根が見え出して來た。

その時、道綱はやつとあとから走つて追つて來たが左の掌につかんだものをそのまゝそつと少しあ

けて見せて、

『母者！ 母者！ これ松蟲ね？』

『どれ？』

窀子は覗いて見て、『まア、この子が？ 本當に松蟲だ！』

『松蟲！ 松蟲！』

と道綱は左の掌を持ち上げて、そのあたりを飛廻つた。

『待つておいで！ 伯母者がよくして上るから——』かゝるはつねに用意して持つてゐる紙を胸のあたりから取出して、それを袋のやうにして、『さ！ こゝにお入れ！』と言つて、それをそつちへとやつた。道綱は拳の中から巧みにそれをその紙に入れて、その末をひねるやうにした。

『もうこれで大丈夫ね』

道綱はそれを手にしたまゝうれしさうに先に立つた。かれは猶ほ草むらを捜すことをやめなかつた。やがてその尼寺の前のところへ來た。

そこにゐた小さな女の童は不思議さうにして林の中を此方へとやつて來る三人づれの客を見てゐたが、そのまゝ奥に入つて行つたと思ふと、今度はそのたしか歌のよめるといふ人らしい二十二三の若い尼が出て來た。

それと知ると、その若い尼の顔が急に赤くなつた。まさかに、今の世にきこえてゐる東三條殿の窀子といふ名高い女の歌人がわざわざこの山の中までやつて來ようとは夢にも思ひがけないことであつたらであつた。かの女はすぐ奥へと入つて行つた。

あたふたと老尼も出て來て、下にも置かぬやうにしてそれを迎へた。

『まア、好うこそ、このやうなところにお出くだされました……。坊のおんあるじからお話は承つて居りましたけれど、わざわざ御出下されやうとはゆめ更存じませぬで……。』

『まア……ようこそ』若い方の尼もいかにも喜ばしさうな感激したやうな聲を立てた。

窀子だちの眼には、全く世離れたさびしい庵が映つた。ついそこが竹の縁になつてゐて、その向うに笕から清水のちよろちよろと落ちてゐるのが繪卷の中の一つの光景であるやうに見えた。そしてその向うは少しの場所が畠になつてゐて、もはやかなりには杖が高くなつてゐるもろこしが風にガサガサと動いてゐた。庵の中央には大きな厨子があつて、そこに二尺五寸ほどの釋迦如來の木像が据ゑられてあつた。香爐だの、香皿だの巻物だのが一面にその前の經机の上に置かれてゐるのを窀子は見た。

道綱は挨拶がすむかすみもしないのに、逸早くそこを飛び出して、『遠くに行くんではありませんよ』と言ふのをも耳に入れずに、そのまゝ向うの草原の中へと入つて行つた。

『生中ひとつでも松蟲を取つたもんですから……。』

『まア、さやうでございますか。松蟲や鈴蟲なら、此處にも澤山をりますほどに、あとでいくらでも取つてさし上げてよろしうございます……』

かうした山の中の庵室にまでも、かの女と道綱とが、東三條殿で名高くなつてゐるといふことは、一面不思議な心持を窀子に誘つた。都にゐれば、さういふ風に他から取扱はれるといふことは、一種の屈辱を感じることであつたけれど——ことに殿の女性に對しての振舞が世間に知れわたつてゐるので、一層さういふ氣持を味はずにはゐられないのであつたけれど——そのためその身の女の歌人としての名譽すら全く汚されたやうな心持さへするのであつたけれども、こゝではそれと反對に、殿の威光がさういふ形にまで大きくひろがつてゐるのがそれとわかるので、その爲めかの女の肩身がひろくこそなれ、決して狭くはならないのであつた。(まア、かういふ美しい方!)と言ふやうに誰の眼にも映るのが得意といふまでではないにしても、決して不愉快ではないのであつた。

『それでも、よく徒歩から御出でになられましたな?』

老尼はそこに冷たい清水を持つて來て勧めたりしながら言つた。

『でも、かなりにはありませんね……もう少し近いところかと思つた——春ならばこのくらの路は、かへつて徒歩より來る方が楽しみで好いのでござれど……姉者はくたびれた?』

『それほどでもない……。そんなに遠くはありませんもの……。あの丘ひとつ越したただけですもの……』

……』

かゝるもあたりがめづらしいといふやうにして言つた。

窀子はそのゐるところが比較的高い位置にありながら、またかなりにひろい平地でありながら、四面が全く山で取圍まれたやうになつてゐるのをさもめづらしさうに、あつちへ行つて立つたり此方へ來て立つたりして眺めた。(いつそかういふところに來て靜かに住んでゐたら……)窀子はこんなことを胸に浮べた。

若い方の尼は、つめたい清水に糖を入れた茶碗などを持つて來て、それをそのめづらしいお客の前に並べた。

『何にもさし上げるものはございませんけど、この清水だけは、それは冷たうございますから……。』

室のこぼりのやうでございますから』

『おう、つめたい』窀子はぐつとそれを飲み干して『もう一杯! 今度は糖を入れずに——』

若い尼はそのまゝそれを持つて向うの方に行つて、山よりのところにもくもくと湧き出してゐる綺麗な清水にその椀を入れて汲んだ。窀子は氣輕に立つてそれを縁のところからのぞくやうにしたが、『そこに湧いてゐるんですね……。まア、何て好いでせう!』かう言つて、たまらなくなつたといふやうにそこにあつたわら沓をつゝかけてそつちへと行つた。

若い尼の手から茶碗を取つてそれをまた一口に飲み干した。

『姉者来て見やな……』

かゝるもその聲をきいてそつちへと下りて行つた。二人はやがてそこに立つて、そのもくもくと漲るやうにわき出してゐる清水を眺めた。

『まア綺麗ねえ！』

『山はこれだから好いのねえ！ 私にもその椀貸して？』

かゝるも自分で茶碗をその中に入れて二杯も三杯もつゞけて飲んだ。

『坊のあるじもこれだけは羨しいつて、參る度に申してをります！』

若い尼は傍から言つた。

『さうでせうね。坊にも清水はあるにはあるけれども、こんなに好いのはございませんもの……』

『本當ね』

かゝるも言つた。

『ですから、夏は始終此方に来てゐたら、さぞ好いだらうなどと申してをるのでございますの』若い尼はこんなことを言つたが、そのまゝ、厨の方へと行つて、そこからさつきの里の女が持つて來て置いて行つた黄く熟した甜瓜を五つ六つ持つて來てそこに浸けた。

『すぐ冷えますでのう』

冷えたら、京のめづらしいお客さまにさし上げようといふのであつた。

老いた尼は晝前の讀經を小聲で始めた。香の烟が靜かに颯る——をりをり鳴らす鉦が靜かに鳴つた。

やつぱり山の中にかくれた優婆塞であるといふ氣が窈子達にもした。

此方では若い尼と窈子とが歌の話を始め出した。初めに若い尼の方が歌を書いて見せると、今度はそこにあつた檀紙に綺麗な手跡で窈子が昨日詠んだ歌を書いて見せたりした。話は容易に盡きようとはしなかつた。内裏で歌のうまい人達の話などもそこに出た。道綱がやがて松蟲を三疋も四疋も捕つて戻つて來た。つめたくなつた甜瓜の皮も厚く剥かれた。

三六

『え？』

びつくりしたやうな調子で窈子は聲を立てた。かの女はそれとも知らずにこの話をそこに持ち出した若い尼の顔をじつと見詰めた。すぐつゞけて、

『それは本當ですか？』

『本當でございますとも……。私などは詳しいことは存じませんが、今から五十年前のこと

ださうでございます。大變なことだつたさうでございます……』

『それではその六條どのの姫君と申すのは、現にそこにあるその老尼さまだと仰しやるのでございますか？』

『さやうでございます』

窈子の言葉につれて若い尼の言葉も丁寧に改められて行つた。

『まア——』

窈子はかう言ふより他爲方がなかつた。かの女は佛間に向うむきに坐つて讀經してゐる老尼の方に目を遣らすにはゐられなかつた。

『まア、本當でございますかねえ？ 六條の四の姫君、先々代の御門の女御に上がるばかりになつて身をかくした？ ——下司の建禮門につとめてゐるものと身をかくした？』あとの一句は窈子も流石に聲を低くした。

『さやうでございます……。』

『まア、ねえ、思ひもかけぬこと——ほんに思ひもかけぬこと——』かの女の頭には、幼い頃祖母から聞いたその時の騒ぎやら噂やらが今更のやうにそこにはつきり浮び出すのだつた。

祖母の話では、それは非常な騒ぎであつたといふ。名高い美しい姫で、其當時のあらゆる姫たちの中

でも群を抜いてゐたといふ。また御門がその姫の美しいのを知つてゐられたばかりでなく、その女御として内裏に入つて行くのを指折り數へて待つて居られたので、何うすることも出来ないので非常に困つたといふ。否、そればかりではない、その姫は死んだか生きたかその行方がわからない。當時の御門の力で、または六條殿の力で、あらゆることをして捜したけれども、何うしてもわからない……。それで長い長い月日が経つた。世間ではいつかそのことを忘れた。その髪長い黛の美しい姫のことを忘れた。六條殿でも、かうわからぬのでは、もうこの世に生きてゐるのではあるまい、地の下に穩かに眠つてゐるのであらう。かう思つてそれを捜すことをあきらめた。そればかりではない、間もなく六條の大殿がおかくれになり、その北の方も、平生四の君、四の君と可愛がつてゐられただけに、それを苦に、そのあとを追つて行かれた。時がまた経つて行つた。その御門さへ位をお譲りになつて二三年して崩御になつた。世の中も丸で遷り變つた。もはやさうした戀愛の話をするものもなければ記憶するものもなかつた。新しい時代の人達も同じいやうに苦しい戀をし、逢はれぬ苦しさを嘆き、思はぬ相手に添はなければならぬ涙を流してゐるにはゐるのだけれども、しかも過ぎ去つたことはもはやその心に響いては來なかつた。ところが、窈子にその話をしてきかせた祖母が死んでからまた五六年経つて、かの女が殿の許に來るやうになつた時分、ひよつくりひとつの物語が傳はつた。それは四の君がまだ生きてゐるといふことだつた。それもその一緒にゐる男は、その建禮門につとめてゐた同じ下司で、年はもはや六

十に近く、女の方は五十を越してゐて、その時分にも睦まじく暮してゐるといふことだつた。そしてそれが何うしてわかつたかといふと、東國に下つたある侍の下司、その男の父親がその建禮門につとめてゐた下司と朋輩だつたので、よく互に出入りしたので、子供心にもそれを記憶してゐた。ところが、何でも武藏野の奥、それもずうつと秩父の方に寄つたところに用事があつて、そこに行く途中、日が暮れたので、無理に頼んである茅屋に泊めて貰つた。ところが、そこにある爺がその子供の時に父親のもとに出入りした下司の男によく似てゐる。非常によく似てゐる。何うも不思議だ……。顔もさうだが、聲がそつくりだ。『太郎は今に大きくなつてえらうなるの？ 院の武士になるのう？』などと言つて頭を撫でたりした下司にそのまゝだ。しかしその彼が何うしてもこんなところにあるとは思へない。他人のそら肖といふこともある。大方それだらう。滅多なことは言ひ出せないなどと思ひ返しても見たが、何うしてもそれに違ひない。それにはその時分子供心にも不思議なものがあると思つて見てゐた耳のところに出來てゐる小さな疣もそのまゝそこにある……。それでかれはたうとうそれを言ひ出した。ところがその爺は、おお、さうぢやつたか、あの時の太郎ぢやつたか？』と言つて、ぼろ／＼涙を流してその素生を打明けた。そしてそこにある婆は、その評判な四の君で、それ以來かれ等は此處に來て一生を送つたといふことだつた。それがまた一時京の噂の種となつて、『それこそ本當の戀と言ふものぢや。さうしてその戀を添ひ遂げたのが羨しい』といふものもあれば、その一方には、『それはその四の君が色戀の道と

いふことを知らんのぢや。戀愛といふものはさういふものではない。それからそれへと移つて行くのが本當ぢや。それが戀愛ぢや』などといふものもあつて、殿もある夜酔つてやつて來て、『何うぢや、それなら一緒に武藏野の奥へ行くか。さうすれば、いやでも朝夕一緒にゐられる……。しかしさう一緒に顔ばかり見てゐたつて、戀はつまるまい。お互に離れてゐて、逢いたうなるのでよいのぢやないかのう』などと言はれたことをかの女ははつきりと覚えてゐる。否、それから暫く經つて、それとわかつてゐながら捨て、置くわけには行かないといふので、六條殿から使者を東國に出したなどといふ話はきいた。しかしそれだけだつた。それからあとのことは知らなかつた。

『え、さうださうです。その相手がある中は、いくら此方から使をやつても戻つては來なかつたさうです……。ところが、今から五六年前、たうとうその相手が亡くなつたので、それで、その屍を焼いて、その骨を持つて、高野へ行つて、そこではじめて身を墨染に更へたのださうです。』

『まアねえ』

さう言つた窀子の眼の前には、戀愛の世界がはつきりとそこに展けられて來るやうな氣がした。誰だつて皆な同じことだ。皆なさうなるのだ……。何んなにあついても、また何んなに思ひ詰めた心でも皆なおしまひはさうなるのだ……。かの女の眼の前には、今でも美しい色彩やら戀のみだれ心やらで満たされてゐる内裏の局の内部のことなどが歴々と浮んで見えた。

『よくそれでもねえ!』

窈子は何方ともつかないやうなことを言つて、

『それでも昔の話などをなさることがございますか?』

『ちつとも……』

若い尼は頭を強く振つて見て、『いつもあゝして經を誦してゐられるばかりです』

『それでも、東國の話などをなさるやうなことは?』

『この山の中がよう似てゐるなんて言ふには言ひますけれども……そんなことはもうあまり多く考へてはゐられないやうでございますね……』

『それでお里の方からは、たまには何方かがお見えになりますか?』

『ところが、そのお里方にも、もはやその時分の方はいらつしやいませず、ひとり残つてゐらつした姉の姫宮——御存じでゐらつしやいませうが、兵部卿にかたづいてゐらつした方、あの方が一年ほどはよくおたづねになりましたが、昨年おかくれになりましたので、もう何方もお出でになる方がございません。皆な孫、曾孫にあたる方ばかりですから……』

『一體おいくつにおなりでございますか?』

『今年七十五とかになると申してをりました。』

『それではまだそれほどお年を召したと云ふでもございませんね……』

『え、え、まだ、お達者でございますとも。齒などもまだ下の方は半分は残つてゐらつしやいますから……』

窈子は深く打たれずにはゐられなかつた。面白い話をきいたといふ以上に大きな人生をそこにまざまざと見せられたやうな気がした。かの女は遠い東國を頭に浮べた。その身も行つて見たいやうな氣もした。

『まア、ね、面白いお話ね……。よくそれでわからずになりましたことねえ?』

傍でできいてゐたかゝるも心を動かされたといふやうにして言つた。

『何しろ、武藏野と申しても、その普通旅人などの通るところではなしに、ずつとわきに入つたところださうでございますからねえ!』

若い尼は説明した。

『さういふことが、今でも出来るでせうか。出来たら、こがれ死に死んだり、一緒に死んだりするよりもその方が好うございますねえ……? それで、子供は出来なかつたんでございませうか?』

『ひとりもなかつたさうでございます』

『まアねえ』窈子はまたその遠い昔の巴渦の中にその身を見出すといふやうにして、『それでもよくそ

の男の人が京にとまつてゐるに、その美しい人を東國につれて行く氣になつたと思ひますね。誰か東國に知つてゐるものでもあつたのでせうね？ さうでなくては、とても知れずに、そこまで行くことは出来ないでせうからね……。それにつけても、京では大變な騒ぎだつたつて言ひますからね。内裏はその話でしんとなつて了ふくらんだつたさうですから。祖母がその話になるといつも眞劍になつて、その人だちは今でも生きてゐるだらうか。それとももう死んで了つただらうか。何處か深い山の中か何かで首を縊つてでもゐたのを誰も知らずにそのまゝ埋めて了つたのではないだらうかなんてよく言つてゐましたからねえ。祖母だつてその話に深い興味を持つたからこそさういつまでもその話をしたんですね。それにその建禮門につとめてゐた人にも、ちやんとした妻もあり子もあつたんださうですから。その妻が泣いて外を歩いてゐたのを祖母が見たことがあるなんて言つてゐたことがありました。それを考へて見ても、戀といふことは不思議ですね。何ういふわけで、さういふことになつたか結局はわからないんですからね』かう言つた窈子の頭には、この梅雨ころに強いて御門に内裏に伴れて行かれた末の君のことだの、それを思ひ死に死んで行つた式部卿のことだの、ことにあの雨の夜の恐ろしかつた光景などがそれとはつきり浮んで來るのだつた。否、さうしたいいろいろな戀愛のシーンの中にかの女の戀のやうなものが雜つてゐるのもやつぱり不思議な心持をかの女に誘はずには置かなかつた。窈子はあたりを見廻すやうな心持の益々多くなつて行くのを感じた。またそれほど關係があるのでも何でもないけれど

も、もしその身とあの坊のあるじの僧と戀にでも落ちて、さういふ風に身をかくすやうな形にでもなつたら、それこそ何んなに世間で騒ぐことだらうなどと窈子は想像した。

そんな話をしながら甜瓜などを食つたりしてゐる中に、老尼のおつとめもすんで、やがて莞爾しながら皆なのゐる方へと出て來た。別に話をするでもなく、たゞ靜かに珠數をつまさぐるやうにして坐つてゐた。窈子は成るだけ見ないやうにしながらも、しかも、それを見ずにはゐられないやうな氣がした。

A Great Love とは言へないまでも、娘の時代から白髪になるまで全く世間から離れて暮した戀愛生活——それだけでも非常に大きなことのやうに窈子には思へた。評判の美人であつたといふ當年の面影も、その端麗な顔の輪廓や、恰好の好い鼻つきや、眉や口元などにそれと指さされるものもなつかしかつた。

かゝるも何か聞けるなら聞きたいといふやうにして、しつこくその老尼の顔を眺めた。
たうとう窈子が訊ねた。

『今、こちらからお伺ひしたんですが、長らく東國にゐらしたさうでございませうねえ？』

しかも老尼は今最早それについては、別に多くを考へてはゐないらしかつた。或はそれは遠い夢か何ぞのやうになつてゐるのかも知れなかつた。

『武藏野には逃水といふことがございますさうですね？』

『ひろい野原でございますので……。三日も四日もその原を歩かねばならぬやうなところで、逃水などと申して、土地のものはいろいろに申すので……。あれはさういふ水があるのではない。霧か何かの加減で、かけろふか何かのやうになつて見えるのだなどと申してゐますで……』

『それでは別に、さういふ名所があると申すのではないのでございませぬ？』

『さう土地のものは申してをりますのう……。』老尼は一つ一つ珠数を数へながら段々話し出すのだつた。『それに、花などもめづらしい花が多うござる。紫の一もと！ そら古歌になどもござるのう。それもいろいろに言ふが、綺麗な花も澤山にあるやうなところぢやのう。しかもこの身の居つたところは、武藏野は武藏野でも、すつと奥の方で、それは山の裾のやうなところでのう。すみだ川といふ川もあるさうぢやが、そこにもよう行つて見ることが出来ざつた……』

『めづらしいことございませぬえ！』

『食ふものなどには別に不自由はせざつたのう。鳥などは雉や山鳥が澤山にゐた。その頃はまだ佛の道に入らざつたものぢやで、罪といふことも知らずに、つれ添ふ人がさういふことが好きぢやつたために、よく狩りに行つてさういふ鳥や獸を捕つて来たものぢや。猪なども澤山に來をつた。冬になると、夜中には狼がようやつて來た。ガサガサツて落葉を踏んでのう。何も食ふものがなくなるぢやろ……。あゝいふ獸は鼻でよく物の臭を嗅いで來るものぢやで、にほひのするものは置いてはならん、味噌汁な

どことに禁物ぢや。そのにほひがすると、戸を壊してまで入つて來ようとするぢや……。でも馴れぢやのう。さういふものにも馴れると、人間は別に怖うも思はなくなるものぢや。また昨夜狼が來をつたなどと言つて何とも思はぬやうになるものぢや。近所にだつて、それは家はないことはない。やはり同じやうな人だちが住んでゐる。稗だつて、食ひなれば、饜しうてうまいものぢや……』

いつもはそんな話をしたことさへないのに、今日はすらすらと話し出すのを若い尼もたゞめづらしいことにして、じつとその顔を打眺め眺めた。

『それでも退屈ではござりませぬでしたか？』

『退屈なこともあつたが、人間は何處にゐるも同じぢやのう。退屈もすれば、おもしろいこともある……。それはのう、今は佛の道に入つて、何も彼も懺悔の身ぢやが、あゝいふ昔のくらしも楽しかつたと言へば楽しかつたのう……。』その時を思ひ出すといふやうにして老尼は話した。

まさかにその話にまで持つて行くわけには行かなかつたけれども、その周圍のことについて、いろいろと訊いたり話したりした。そこらに住んでゐるものは、高麗から移住して來たものでなければ、昔からずつと百姓として住んでゐる人だちだつた。秩父の方には大きな深い山があつて、その向うに町などがあるなどと聞いたが、そつちには行つたことはなかつた。高麗から移住して來た人達の方が、農事にも巧みに、文化も進んでゐて、もとからるた百姓には馬鹿にされながらも却つて收穫などを多く貯へて

るといふことだつた。話の間々には、老尼は念珠を手まさぐりつゝ、佛の名を唱へた。

そこで一日あそんで、夕日がいくらか涼しくなつた頃から、窀子だちはその尼寺からもとの坊の方へと戻つて来るのだつた。道綱は鈴蟲や松蟲を澤山捕つて、それを母親に拵へて貰つた紙袋に入れて、喜ばしさうに手から離さずに持つて歩いた。かゝると窀子とはこんな話をした。

『年を取ると、あのやうになるものでござるかのう！』

『ほんに、何も彼も忘れて了うものと見える……』窀子は考へながら、『あれでもいろいろと苦勞があつただらうに——その父母のことも考へたらうに——その父母や叔父伯母などが亡くなつてからずつと年月が経つて後にやつともどつて來たのぢやから、ほんにそら水の江の浦島が子と同じぢやのう……』

『ほんに同じぢや』

『不思議なことがあるものだ……。過ぎ去つたあとで考へたのでは、もうその時の心持は本當にはわからなくなつて了つてゐるものぢやで……。夢のやうぢやと言つたがほんにさうぢや』

『それでも、その男のことを忘れてはをらぬらしい。やつぱり佛の御名の間々にはその男のことを思ひ出してゐるやうでござつた……。戀とは不思議なものだといふ氣がした……』

『ほんに、浦島ぢやのう』窀子も深く感ずるやうに言つた。それから比べると、自分の戀などはまだ

やつとその戸口に入りかけたもののやうに思へた。殿は本當は此身より他にないやうなことを言ふのであるけれど、それが何處まで信じて好いかわからないやうな氣がした。

窀子だちは坊に歸つてから猶ほ十日ほどゐるが、孟蘭盆が近づいて來たので、一度京の家の方へと戻つて來ることにした。山から出て來る小川の岸には、さゝやかなみぞ萩などが水にぬれて咲いてゐるのを目にした。標野に來ると、今まで籠つてゐた山の峽に雲が白く徐かに靡いてゐるのがそれと振返へられた。

三七

それから二年経つた。その間にはいろいろなことがあつた。その中でも窀子に取つて印象の深かつたことは、父親が陸奥から歸つて來たことだつた。父親は八年の間にいたくも老いた。話をするにもわくわくするやうな表情をした。多賀の府に留つてゐることが出来れば好かつたのだが、それが出来ないで、言ふに言はれない艱難を嘗めた話などを父親はした。しかしそれといふのも小野の宮の機嫌をそこなつたからで、それも奥を探つて見ればやつぱり窀子が兼家の許に行つたことに起因してゐるらしく、小野の宮が失脚してから、やつとその身が浮ぶやうになつたなどと父親は話した。『それにしても結構なことぢや……。殿の世になるのも、もはや程近い。目の前に見えて來た……。これからは、そなたも運

がひらけるばかりぢや』こんなことをも言つた。

それにつけても母親の喜びは何んなであつたらう。八年の長い月日を離れてゐてしかも一刻も心に思はないことはなかつたのであるから、窈子の眼にもこの世の喜びとは思へぬやうな喜びが映つた。母親はたゞわくわくしてゐた。何から話して好いかといふやうにたゞ黙つてじつとして顔を見合せてゐたりした。窈子を出かけて行つては『母者、この頃、何うかしたやうだ……もう昔のやうに物を言はなくなつた……』などと言つた。

政治上の兼家はまだ正面に出て行つたといふわけではないので、それほど自由がきくわけでもなかつたけれども、長い間虐けられて左遷されてゐた窈子の父親を然るべきところにすゝめるくらの力は持つてゐた。兵部省の輔に任命されて、やがて、そつちの方へと勤めるやうになつた。

もう一つ窈子に取つて喜ばしいことがあつた。それは他でもない、道綱が童殿上したことであつた。さすがに兼家も道綱が可愛ゆく、東三條にも、堀川にも子供は大勢ゐないことはなかつたけれども——また童殿上してゐるものもふたりほどあるにはあるのだつたけれども、しかも一番道綱が可愛ゆいらしく、その當座は日ごとそこにやつて来て、いろいろとその世話を焼いた。時には自ら自分の乗る牛車の内に入れて、そして一緒に參内することなどもめづらしくはなかつた。窈子はその始めて童殿上した時の道綱の扮装のさまをいつまでも忘るゝことが出来なかつた。

幅のひろい狩衣に小さな冠をして、沓をはいて父親に伴れられて牛車へと入つて行くのを見た時には、母親らしい涙が胸一杯溢れ漲つて来るのをとゞめることが出来なかつた。

いつかは憎んで憎んでも足りないやうに思つた兼家すら、さういふ風にして道綱を伴れて出て行くのを見ると、何とも言はれない愛情が——肉體でなければ味ふことの出来ない愛情がそこに體に満ち溢れて来るのを感じた。——何んなに遊蕩に身を持ち崩してゐるにしても、今でもその癖はやまずに、新しい女が出来たりなどしてゐるのをはつきりと知つてはゐるにしても、それが深くこんがらかつて、何處までが憎だか、何處までが愛だか自分にもわからないやうな気がした。否、さういふ女が他にあるがために、そのために一層不思議な愛情が漲つて行くのを感じた。口惜しさ、腹立しさ——それすらそこに愛となつて絡み合つてゐるやうな気がした。

ある日は道綱が話した。『だつて、へんな美しい人が来て、この身を伴れて行くのだもの……。そしてね、母者、その人が貴い女の人の……局の人たちがその人のことを大騒ぎしてゐるの……。この身もびつくりしちやつた……。すんすん奥の方へつれて行つて了ふんだもの……。母者、あの宮知つてゐるのかえ……。いろいろなものを呉れたよ。羊羹だの栗だの高つきにのせて……。それから母者にもよく言うてくれと言はれてぢや。あんな美しいけだかい人この身は見たことはない……。』

『そちは知らぬかのう……。あの堀河の家にゐるた宮——？』

『知らぬ——』

『さうかのう。知らぢやつたかのう？ その宮ぢやらう？』

『さうか——それぢや、母者よく知つてゐるんぢやな……。この身はそれと知らないからびつくりしちやつた。女子のゐるところぢやのう？ 澤山々々女子がゐた。そしてこれがあの東三條殿の歌よみ人の子だなんて、皆なしてこの身をおもちやにするのだもの……。しまひには睨めてやつた——』

『まア、この子が……』

『だつて、宮はにこにこして何もせられぬのだけでも——その女房たちが人を何の彼のと言ふのだもの……』

窈子の眼には大内裏の藤壺のさまがそれとはつきりと映つて見えるのだつた。女の歌人としてこの身がさうした社會にも認められてゐることが——その子の道綱の口からもさういふことがきかれるといふことが、かの女に一種の愉快を感じさせた。

『宮はそれから何うなされた——』

『宮のゐるゝところまで伴れて行かれた……。そこでいろんなことをきかれた。……父上のこともきかれた。……母者のこともきかれた。そして母者に孝をつくさなければいけないと言はれた……』

『まア……』

『それから歸る時、また今度來よと言はれた……。母者、あそこはするぶんひろいところね。幾曲りいく曲りと曲るんだもの……。わからなくなるくらゐね……？』

『……』

窈子は末の宮の戀のことを頭に浮べずにはゐられなかつた。あの東國に走つた老尼の戀愛のことも不思議にもそれに引くらべて考へられた。

『それからすつともどつて來た？』

『え……』

道綱は可愛く點頭いて見せた。

『さういふところでは、しやんとしなければいけませんよ。行儀をよくしなければ、でなくつては、殿上がつとまりはしないんだから……』

『大丈夫……』

『それから、一緒にゐる友だちと争ひごとをしてはなりませんよ』

『大丈夫……』

かう軽く言つてそして表の方へと出て行くのだつた。

その年は何方かと言へば窈子は幸福だつた。夏になつてから宮から消息があつて——この間は道綱ど

のに逢へてうれしかつた。お身をまのあたり見たやうな気がした。眉から額のところがよう似てゐる……。また今度逢はせていたゞきませう。禊の時には、棧敷が空いてゐるから来るなら来ては見ぬか。運好ければお目にかゝることが出来るかも知れない……。などと書いてあつた。で、禊には母と道綱とを伴れて出かけて行つた。不幸にして宮には逢ふことは出来なかつたけれども、そのめづらしい儀式をまざまざと見る事が出来たのは嬉しかつた。

父母もいつも楽しさうに睦じさうにしてゐた。やはりいろいろな境を経て來たのでなければ人間は何うしても静かなむつまじい心持になることは出来ないといつかも山の坊のあるじが言つたがそれが今はつきりとかの女にも點頭かれるやうな気がした。二三年前から比べたら、かの女は何んなにいろいろな瞋恚や嫉妬や不平や悔恨を捨て、來たか知れなかつた。それと共に生きてゐるといふことのたうとさが次第に飲み込めて來た。生きてゐるさへすればいつかは好くなつて來る。いつかはさうした苦しみを捨て去るやうな時が來る。さういふことが生きてゐるといふことである。殿の遊蕩にしてもやつぱりその通りだ。その時にははつと思つて吐胸をつくが——この身の戀などは一顧にも値ひせず捨てられて了ひさうに悲觀されるが、じつとして見てゐると、そんなものではなくて、そこにも不満足と不平と不運とがいつでも渦を巻いてゐて、いつか春の雪のやうにあとなく消えて了つてゐるのを見た。あの時それを堪へ忍ばなければ自分は何うなつてゐたかわからない。自分で自分の戀を破壊するやうな形になつて行

つたに相違ない。あとで後悔したつて追ひつかないやうなことになつたに相違ない。これが古の人のいふ耐へ忍ぶといふことか。忍耐が人間には一番肝心だといふことか。しかし耐へ忍ぶといふ心持ともいふくらは違ふやうである。それよりもつと努力の要らない、そのまゝそつとして置く心持——まづ暫くそれをわきにやつて置くといふ心持、むしろさういふ心持に近いやうなのを窈子はこの頃染々と感ずるやうになつた。

母親は何うしてかこの頃丸で違つたやうな人になつた。もとは何方かと言へばいろいろなことを氣にしたり、殿のことについても時には窈子以上やきもきしたり、かゝるに對してもわるくこだはるやうな心持を見せたりする人だつたが、父親が歸つて來てからは全く静かな落附いた愛情に富んだ母親になつて了つた。嫁に對してわるい顔などを見せたことなどもなく、殿のことにしても「何と言つたつて、お前、立派な人なのだからね……。堅いお方なのだからね。だからお前が始終からかはれてゐるやうなものなのだよ。お前がむきになつて怒つたりするので、一層さういふ氣になるのだよ。好い方なんだからねえ」などと言つて、もう心づかひすることは無いといふやうな任せ切つた心持で話した。

かゝるもやつぱり窈子の言ふ通りだといふのだつた。此頃では險しい言葉などをかけられたことは一度もないといふのだつた。

『やつぱりひとりであるたので、さういふ風になつたのかしら？』

『さうかもしれない……』

こんなことを二人は話した。道綱などが行つても『あこ来たか、よう来た、よう来た！』などといかにも嬉しさうであつた。羊羹などを高つきに載せて出した。

ところが二年目の春の祭の濟むころから、何となく胸がつかえるなどと母親は言ひ出した。その癖その祭見には、棧敷が取つてあつたので、窈子を始めかをるや吳葉などと一緒に出かけて行つたのであつた。そして風が吹いて塵埃の立つ日に御輿の赤牛にひかれながらねるやうにして行列の徐かにやつて来るのを見たのだつた。中宮の出し車の美しさがその時あたりの眼を惹いた。さまざまの色……さまざまの模様……その中でたしか藤色なのが中宮だつた。忘れもしない、その日の夕方から、母親は何うも胸が變だと言ひ出したのだつた。

しかし窈子は別に深くそれを心配しなかつた。一時のことだと思つた。物でも取りすぎたのだと思つた。丁度そのころ殿が續けて來たので、二三日無沙汰して行つて見ると、奥の對屋に几帳して寝てゐて、思ひもかけないほどやつれてゐた。醫者にもかけて見たが、何うも本當のことはわからないといふ。何か憑物でもしたのではないかと言つてそれを落すために修験者などと呼んで見たが、何うもそれでも驗が見えない。『なアにそんなに案ずるには及ばない。いまにぢきに治る……。お前が今日來るまでには起きるつもりでゐたのだが……。』などと病人は手輕に言つてゐるのであるが、何うもいつもの風邪とは違つ

てゐるらしいので、窈子は急に慌て出して、早速殿のかゝりつけの醫者を招んで來て見せたり、寺でごまを焚いて貰ふやうにわざわざ使者を北山に出したりした。それから梅雨の節が來て、往つたり來たりするのも路が泥濘で困つたりしたが、しかも心配してやつて來る度に『もう好い。今日は大分好い。北山のごまがきいたと見えて、気分がさつぱりした……。』などと言つてゐるに拘はらず、次第にその體のやつれて行くのを目にした。そればかりではなかつた、さみだれが晴れて京の町が日影にかゝやく頃になると、急に胸が強くさし込むやうになつて、左の脇腹のところが非常に痛んだ。『かをる！ 氣の毒だが、またこゝを押して呉れ！』かう呼んでそこを強く強く押して貰つた。

窈子は吳葉に言つた。

『何うも、いつもとは違ふのでね……。あの痛みが何うもわからない……。何かお中のうちに腫れたものでも出來てゐるのではないかと醫者は言うのなれど……。』

『それだと困りますねえ』

吳葉も窈子の心を知つてゐるだけに、ひと事とは思へぬのだつた。

急に思ひ附いたやうに、

『腫物ならば私はちよつと行つて參じませう。大原野に、それによくきく地藏さまがございますから……。そこにさへお參りすれば、どんな難かしい腫物でも、三日が内に口があいてよくなると申します

から……』

『でも、本當に腫物だか何だかわからないのだけれど……』

『それでも、私、行つて參じませう。わけはありませぬから』

吳葉はさう言つて、桂川の土手に添つた長い路を遠く遠く歩いて行つた。大原野の春日の社のあるところからはもつと南で、昔、都が一度そこにあつたなどと言はれるところだつた。そこには竹むらの蔭に小さな地藏堂があつて、そこに大勢腫物のために參詣する人だちが來てゐた。

窀子は此頃はまた大きな壁見たいなものに打つかつたやうな氣がするのだつた。折角いくらか人間のことをわかつて來て、いくらか落附いた氣持になつてゐたのに、それさへ再び夏草のやうに亂れ勝になつた。かの女には母親なしの自分の生活を考へて見ることは出來ないやうな心持に満たされた。苦しいことがあると言つては、腹立たしいことがあると言つては、わからないことがあると言つては、すぐ母親のもとにかけつけたものであるのに——母親はそれを自分のことのやうにして心配もすれば慰めもして呉れたものであるのに——母親があればこそ今まで死にもせず生きて來ることが出來たと思はれてゐるのに——あのやさしいにこにこした顔があるために何も彼も慰められて來たのに——もしものことがあつたりしたら？ 窀子はそこまで行くと深い憂鬱に閉ぢられずにはゐられなかつた。かの女はじつと妻戸のところ立つて竹むらに夕日の影の消えて行くのをたまらなくさびしい心持で見詰めた。

時にはひとりで涙が流れて來た。孤獨の涙が。今度は治ることがあつてもいつか一度はわかれて行かなければならない涙が。豫想したことのないひとつの事件がその眼の前に起りつゝあるといふことが。その曉にはその身は何うなるであらうと思はれるやうなことが。それにしてもかの女は一度だつてそのやうなことを想像したことがあるだらうか。母親がなくなるなどといふことを考へただらうか。あのやさし莞爾した顔が、この世になくなるなどといふことを思つて見たことすらあつたらうか。窀子は涙ばかりではなく——それ以上にじつと空間のひとところを見詰めるやうな心持になつた。

何うかして一度は治つて呉れるやうにと祈つた効もなく、次第に母親の病氣のわるくなつて行くのを窀子は何うすることも出來なかつた。此頃では夥しく脇腹が痛んで、その内部に出來てゐる腫物が外部から觸つて見てもそれとわかるくらゐになつて行つてゐるのを見た。醫者の罝法も役に立たず、修驗者のやつてゐる祈禱も後には徒らに病人を焦立たせるのみとなつた。窀子は毎日のやうに出かけて行つたが、その間は十町ぐらゐあつて、それは半ばは小野宮の邸の築地に傍ひ半ばは草むらになつてゐるところについて曲つて行つた。かの女は常に深い憂鬱に満たされながら、時には歩き、また時には網代車に乗つて出かけて行つた。草むらには暑い日影に晝顔が咲いてゐたり、阜斯が人の足音につれて草の中に飛んで行つたりした。蟋蟀なども頻りに啼いた。小野宮の築地の壞れの中からは四の君らしい琴の音が頻りにきこえた。

何うかするといんち打ちの童の群の中を通つて行かなければならないやうな時もあった。さういふ時には、つとめてそれを避けるやうにして、危いところは驅足で通つた。時にはそれが飛んで来て車の窓に當つたりなどした。牛飼は大きな聲で怒鳴つてその童の群を追ひ散らした。

いくらか気分が好いといふ時には、窈子は非常に元氣づけられたやうにして戻つて来た。『いくらかは小さくなつた……それもお前が大原野に參つてくれる御利益だらう。あれで小さくなつて行けば、それこそ優曇華の花が咲いたやうなものぢや……』などと吳葉に言つた。吳葉は今でも三日おきに行勝をつけ蘭綾笠をかぶつて、わざわざその遠い地藏堂へと參詣に行つた。

兼家の眼にも、その憂愁のために窈子の頬が此頃夥たしくやつれて來てゐるのが映つた。『何うかして、何うかしてあの母者の病氣を治したいものぢやが……あの内裏の醫師に見せて貰うてつかはさうか』などと兼家は言つた。兼家はやがてそれを取計つて呉れた。當代に名高い醫師の車はやがてその邸の西の對屋まで奥深く入つて行つた。しかし何うにもならなかつた。窈子の憂愁はつひに除かれなかつた。

ある夜はこんな話が兼家と窈子の間に出了た。

『だつて、母者にもしものことがあるといふことは私には考へられない……。もしそんなことがあつたら、とてもこの身も生きてゐられない……』

『こまつたことぢやのう……。何うかして、もう一度もとにどしたくないものぢやが……あの醫師にかつてさへ、験が見えないとなると、他に何うもならないからのう……。困つたものぢや』

『七年も八年も父上と離れてゐて、やつともどつて來て、これから少しは楽しい暮らしも出來ると思つてゐたのに……それなのに、こんな病氣に取つかれて……』

『何うも困つたものぢや。さうかと言つて、天命ばかりは何うにもならんでな。何のやうに尊い方でも、いざとなつては止むを得ないぢやでな……』

『この身は、この身は——』

窈子は泣き沈むのだつた。——今日もかの女はその母親の枕邊に長い間坐つた。痛みだけでも何うかしたいと思つて、せつせと罽法を手傳つて取替へてやつた。かゝるも一生懸命に世話をした。父親も今日は内裏を休んで一日そこに顔を出してゐた。長い間の病氣に母親は非常に衰へて、顔などは丸きり別な人のやうになつて了つた。それに、此頃ではおも湯すら十分に取ることが出來なかつた。少し入つたと思ふと、すぐまたそれをもどして了つた。それにじつとしてそこに坐つてゐる父親を見ても、涙がすぐ込み上げるやうに出て來るのだつた。そんな苦しみのない昔は好かつた。父の老いることだの、母の死ぬことだのは少しも考へずに、いつでもそこに行きさへすれば、莞爾したその顔を見ることの出來た昔は無邪氣で且つのんきだつた。何んな苦しいことがあつても、母に行つて話しさへすれば、それで憂

さの八分通りは醫された。それなのに、その今の瘦せ衰へた顔は！ 連日の苦痛にもがいた姿は！ 絶えず體を動かすためにばらばらに亂れた髪は！ あれが母だらうか。あの衰へた病人があのやさしい常ににこにこした母だらうか。否、人間は一度はさうしたことに逢はなければならぬといふことは満更知らぬではなかつたけれども、しかもそれがこんなにつらく且つ悲しいものであらうとは夢にも知らなかつた。またこんなに頼りないものであるとは夢にも知らなかつた。窈子は今までに経験したことの無い大きな悲哀のその前に避くべからずに迫つて來るのを感じた。兼家は『それが人生だ！ 誰だつてさういふ経験は嘗めなければならぬのだ！』窈子があまり思ひ崩折れてゐるのでしまひにはそんなことを言つたけれども、とてもそんなことではその現在の憂悶をまぎらせることは出来なかつた。それほどかの女は母親の大切さを感じた。

ある夜は、窈子は道綱をその傍に寝させた。

道綱は怪訝な顔をして母親の顔を見た。

『母者、母者は何うしてそのやうに泣いてゐる？』

『……………』

さう聞かれたただけ一層たまらなくなつたといふやうにして窈子はその衣の袖を顔に當てた。

『何うかしたの？』

窈子は首を振つて、『何でもない……………何でもない……………』

『でも、母者はさつきから泣いてゐるんだもの……………』童殿上してから丸で別な兒のやうにおとなしくなつた道綱は、いかにも心配さうにこんなことを言つて母親の顔を見詰めた。

『何でもない、何でもない……………』

窈子は感慨無量だつた。涙は盡きずに出て來た。

『……………』

不安さうに何か言はうとして言はずに母親の顔を見た道綱が窈子にはたまらなくいぢらしくなつた。

『何でもないのよ……………心配しなくつても好いのよ……………おばアさんのことなのだから……………』

『おばアさんの病氣？』

『さう……………おばアさんの病氣が治らなくつてね。困るね。』

『本當だね……………』

道綱はそれでもいくらか安心したといふやうにして母親の顔を見詰めた。と、それと同時に窈子の頭にはいろいろなことが一杯に漲るやうにあつまつて押寄せて來た。兼家のことについてこれまで長く苦しんで悶えて來たこともあるが——今でもそのために苦しんでゐないことはないのだが、しかもそれ以上この人生のことが深く大きくかの女の頭にひろげられ逼つて來るのを感じた。今までのかの女の心

持のやうな気分ではゐられないやうな気がした。道綱と自分のことがそれとはつきり思ひ出されると共に、兼家と自分と道綱のことがはつきりその眼の前に浮んで來た。自分も一度はさうした悲哀をこの道綱に味はせなければならぬのである。母子の別れは何うしたつて否定することは出来ないのである。さう思ふと、戀といふものに對する考へ方も、愛といふことに對する考へ方も、今までとは違つて、すつかりそこにその全面をあらはして來たやうな気がした。何んなに人間に悲哀があつても——その憤懣と嫉妬とのために身も魂も亡びさうになるやうなことがあつても、そんなことには少しも頓着せず、人生と自然とはその微妙な空氣をつくつて、徐かにその歩んで行くべきところへと歩いて行つてゐるのだつた。さう思つた時には窈子はたまらなく悲しくなつて來た。自分のその身が悲哀と共に何か大きな空間にでも漂つてゐるやうな気がした。窈子は道綱に知れぬやうにそのこみ上げて來る涙の潮を咽喉のところ堰きとめるやうにした。

三八

窈子は裏の築地の出口のところ立つて、もはやそろそろ秋にならうとしてゐる草原の方を眺めた。小さな野萩、それにボツボツと露が置いてあつた。そしてそれも時の間に日影に乾いて行くのだつた。水引の花などもさゝやかにけれなるをそこに見せて、これでも花だといふやうにツンツン草の中に雑つ

て見えた。何故か窈子の心はさうしたはかないものの方にのみ寄つて行つた。誰もめづる花も好いだらう。大きな美しい花も好いだらう。しかしそれよりもあるかないかの花——微かにそこに草原のみだれの中にその小さな存在を示してゐるやうな花、さういふものが何とも言へずなつかしいやうな気がした。さういふ花さへある。二日と咲いてゐない花さへある。さうした存在でさへひとつの立派な存在である。こんなことを考へながら窈子はじつとそこに立盡した。

そこに吳葉が行騰姿でその參詣から歸つて來た。

主人思ひの吳葉は、心配さうに傍に寄つて來た。

『御苦勞だつたね……』

吳葉の姿にしても此頃次第に年を取つて來てゐるのを窈子は見落さなかつた。かの女は言ふに言はれない感謝をそこに感じた。母親についての自分の同情者！ 自分のためにその半生を奉仕しようとするその同情者！ 母親がゐらず、吳葉がゐなかつたら、その身はとてこゝまで無事に來ることは出来ないに相違なかつた。

『今日は？』

いつも引いて貰つて來るみくじのことを窈子はそこに持ち出した。

『今日のは、あまり好い方ではございませんでした——』

袖のところから、吳葉はそれを出して見せた。

『二十九凶』としてあつた。窀子はだまつてじつとそれを見詰めた。

母親にこれまで何のやうに心配をかけたであらうといふことが、その時何故かはつきりと胸に浮び上つて来た。

『でも、そんなにわるいおみくじではないさうでございます……』

『……………』

『きいて見ました……ところが、この凶は同じ凶でも吉に向う方の凶だと申しました。御心配なさることはござりますまいと申しました——』

『御苦勞だねえ、本當に……』

かう言つて窀子は吳葉がいつものやうに向うに歩いて行くのをじつと見詰めた。かの女は自分ながら不思議な氣がした。何うしてかう物を見つめる氣になつたか。何うして小さな野の花に眼をつけたり、愛宕の山の上に白くふわふわと靡いてる一片の雲に心を惹かれたりするのか。これもそのためか。その大きな悲哀の壁を前にしたためか。その日の夕暮には、兄の長能がやつて来て、父親もさびしさうにしてゐる話などをした。

人の噂では兼家はこのごろまた新しい女に沈湎してゐるといふことであつたけれども、窀子に對して

は、そんな形は少しも見せなかつた。昔はさういふことがあつたりすると、わざとそれをその前にはばせて、半分は嫉妬をやかせて見るといふやうな態度に出るのが常であつたけれども、今はそんな風は面に表はさずに、却つて常よりもやさしい態度に出るやうになつた。そしてその心持は窀子にもよくわかつた。しかも窀子はそれに取り合はうとしなかつた。今更何うにもならない運命を窀子は感じた。

ある日は窀子はその家の築地の傍をさびしい葬式の通つて行くのを見た。そこには旗も行列も何もなかつた。小さな棺を近い縁族のものが五六人して送つて行つた。夕日が棺を卷いた白い布に暑く照つた。烏帽子姿をした人たちの額には汗がそれとにじみ出した。此の葬式は表の通りは通らずに、内裏の裏からぐつと大廻りに廻つて、鴨河をわたつて、鳥部野へと行くのだつた。何故かそのあはれな葬式の棺がそこに立つてゐる窀子の眼を惹いた。標野の向うには、小さな丘を二つ三つ前景にして、北山の起伏が碧く碧く見えた。葬式の棺はさびしい野をトボトボと丘の方へと遠く動いて行つた。

三九

『使がまゐりました！』

かう言つて入つて来た吳葉の聲は震へてゐた。

『何うしたの？』

『何だか、御病人の様子が變でございますから、すぐにお出で下さいませうに——』
『オ、それは——』

かう言つて窀子は慌たゞしく身を起した。それはもはや申の下刻になる頃だつた。かの女は今朝から向うに行つてゐて一時何うかと思つたのが一先づおさまつて、また平常のやうに口をきくやうにもなり、腹の内部の痛みもそれほど烈しく訴へなくなつたので、ちよつと用事のあるのを足しに家の方へもどつて来て、それもすまして、ほつと息をついたばかりのところだつた。かの女はいつもならさうした端近なところまで出て行くやうなことはないものであつたけれども、慌て、飛出して、その使のものが來てゐるところまで行つた。

『御様子はよく存じませぬけれど、殿がすぐお出を願ふやうにとおん申附けでござりまするゆゑ……』

走つて來たと見えて、息をきらしながら言つた。

取るものも取り敢へず、吳葉と俱に窀子は急いで出かけた。

裏の階段から慌たゞしく入つて行くと、そこに兄の長能が事ありけに出て來て、あぶなく兩方で突き當らうとした。

『何うかしたのですか？』

『……………』

兄の長能はそれには答へずに、急いで行けといふ手まねをして、そのまゝ、用ありけに向うへと走つて行つた。

さつき此處から出て行つた時には、まださうした慌たゞしさはなかつたのであるが、そのこの一室に入ると、家の中の人といふ人は皆なそこに集つて、その向うには眞面目な顔をして手を拱いて坐つてゐる父の姿が見え、その此方にかゝるが覗くやうにして何かしてゐるのがそれと眼に入つた。窀子の胸は大きな氷塊にでも塞がされたやうに一種何とも言はれない冷めたさと嚴そかさにと撲たれた。窀子は顛倒しさうな頭を抱いて、滑り込むやうにして纔かにその傍に行つた。

窀子は天にも地にも替へ難いたゞひとり力と頼んだ母親が、その衰へ果た顔を仰向け加減にしてじつとしてゐるのを眼にして、われを忘れたやうに、『母者！ 母者！』と二聲呼んだ。

母親はもはやすつと以前から、誰が何と言つても、顔を押しつけて呼ぶやうにしても、更に答へようともしなかつたがこの時ひよつくりと眼を明けて、そして驚いたやうに、一度立去つた元の世界にまたもどつてでも來たやうに窀子の顔をじつと見詰めた。『母者！ この身！』かう窀子はつゞけて言つたが、母親はちよつとやうなづいただけで、そのまゝ、何も口がきかずに、もはやこれで満足した、この世には思ひ残すところはないといふやうに、次第にその眼が閉じられて行つた。誰れの眼にも臨終が來たの

であるのがそれとわかつた。

『母者！ 母者！』

この窀子の叫びにはもはや何の反響もなかつた。

窀子の涙はほろほろとその母親の顔の上に落ちた。佛の唱名がその周囲から起つた。——急に人だちは慌て出した。今度はそりかへるやうになつて窀子が昏倒した。

『窀子さん、窀子さん！』

かゝるがいきなり飛んで来て、一度横に倒れた窀子を抱え起した。父親もその傍に寄つて来た。『水！水！』と誰かが叫んだ。

慌たゞしい光景が一室を占領した。皆な總立ちになつて此方へと寄つて来た。兄の長能は誰かが持つて来た水をいきなりその顔へと吐きかけた。『窀子！ 窀子！ しっかりとしないではいけない、窀子！ 窀子！』と叫んだ。窀子はかゝるの膝に身をもたらせて、解けた髪を半ば亂したまゝ、全く喪心したもののやうにぐたりとなつてゐた。長能は猶ほしきりに水を顔の面にかけた。

『窀子！』

父親の聲がはじめてその耳に入つたやうに見えた。窀子は薄く薄く眼を開いた。『オ、窀子さん、気がつきましたか！ しっかりとしなくつちやいけませんよ。あなたは、大切な人なんですよ、ね、窀子さ

ん！』とかゝるは叫んだ。吳葉は唯オドオドしてゐた。

『本當にしつかりしてくれ……。まだこの身がゐるのぢやから……。のう、この身より先に世を早くしては不孝ぢや……。それはそなたの悲しみはわかるが……。そなたにもしものことがあつては——』父親は窀子の顔を覗くやうに言つた。窀子はかゝるや吳葉たちの手で、やがて別な静かなところの方へとつれて行つて寢かされた。窀子はまだ本當にその意識を恢復したとは言はれないやうにして、眼をぱつちりとは明けてはゐるが、時々痙攣するやうにその手や口を震はせた。吳葉は布を水に浸してそれをその額の上に置いた。

その話をきいて道綱がやつて来た。その時にはそれでも窀子はその手を取るやうにした。微かな笑ひもその口のあたりに上つた。『そら、母者はもう大丈夫！ 安心なさいませ！』吳葉はかう言つて道綱をなだめた。夜になつて兼家もやつて来てその枕邊に坐つた。

解 説

加 藤 武 雄

その、數多くのすぐれた紀行文が之を證明するが如く、作者は、足跡天下に普く大旅行家であつた。しかも、作者の全國に周遊するや、單に自然の美を愛して懷を烟霞に遣るに止まらず、そこにこの歴史を尋ねて、今昔の感慨に耽るのを常とした。作者は、あらゆる地方の、山川風物をつまびらかにしてゐるが、同時にその地方の沿革にも精通してゐた。作者に於ては地理と歴史とが、常に一體となつて、その腹笥を満たしてゐたのである。

未知の世界にあこがれるロマンチズム、乃至新しい刺戟を求めて止まない作家的好奇心といふやうなものから、作者の旅行癖は生れたのであらう。そして、作者の歴史癖はその旅行癖から、誘起されたと見てもいゝか何うか？ 作者の兄なる人に、史料編纂の業に従つてゐた人もあつたのだから、或はその方面からの感化でもあつたのか？ その邊の事はよくわからないが、作者のリリズムが、常に時の推移といふものにかゝつてゐた事は、作者が「廢墟」といふ一語に、藝術的感興を傾けてゐたといふ事

實を見ても知れる。作者は、横に見渡すと共に、縦に眺める人であつた。先例の關係は兎も角も、作者の歴史癖がその烟霞癖と共に作者の本質から流れ出したものである事は疑ひ無いと思ふ。

此の全集には収録し得ないと思ふから、長きをいとはずにここに引用するが、大正十四年七月に發行された「花袋行脚」の中に次のやうな一節がある。

源義朝の東國に遁けて行つた路をも私は歩いて見た。私は山端から高野川に沿つて白い埃の多い街道が次第に山深く入つて行くのを眼にした。林と畠と村落とが、それからそれへと續いて行つてゐるのを眼にした。左に岩倉川を入れて、いかにも山村らしい高野の聚落をも通り抜け、向うに御蔭神社の屋根の見えるやうになつたあたりになると、既に全く山の中で、大比叡の裾がすつと絶壁を成して谷まで落ちて來てゐるやうになつた。水勢は咽ぶやうに微かにあたりに響いてきこえた。

六條河原でとても駄目といふことになつて、そこで潔く戦死しようとしたのをたつて鎌田にとゞめられて、止むなく馬の首を北に向けたが、その時にはもはやあの三條通を逢阪山へと抜けて行くことは出来なかつたので、義朝達は止むなくこの路を北へ北へと落ちることになつたのである。中宮大夫進朝長、兵衛佐頼朝、熊谷直實、齋藤別當實盛、さういふ人達の轡を並べて逃れ出て行つたさまが、そこ等を歩くとはつきり眼の前に浮んで來た。

千束がかげでかれ等は叡山の僧徒にその前を塞がれたのであるが、その地名が「掛」といふ字で今

日猶ほ残つてゐるのは不思議と言はなければならなかつた。私はそのこの谷の縁に添つてくると曲つて行つた路の奥に、高い山畠の疎らな檜林とを後にして、二三軒のわら屋の庇を並べてゐるのを見た。私はちつとそこに立盡した。

そこにゐた爺に、

「こゝは昔、千束がかげと言つたところですね？」

「え？」

「千束がかげ」

「知らんな」

そこに住んでゐる人達は、曾てかういふことがあつたところだなどとは夢にも知らないのであつた。

「この掛といふ村は昔からあるにはあるのだね？」

「さうだ——」

いくらきいたつてわからないので、私はそこを去つた。現在から過去、私の眼の前にはあの智慧者の齋藤實盛が兜を捧げてそこに群集してゐる山徒の中にはいつて行くさまがはつきりと映つて見えた。で、そこから少し行くと、八瀬の聚落がある。信頼が義朝の落ちて來るのを待つてゐたといふ松原——八瀬の松原は何處にあつたかわからなかつたけれども、此處等に來ると、谷は深く、水勢は高

くいかにも山の中に来たやうな気がした。コバで葺いた家屋がそこにも此處にも見えた。

「花袋行脚」は原稿紙にして三四百枚のものだが、大體こんな調子で書かれた史蹟訪弔記でそこには作家の歴史的知識が驚く可き豊富さで示されてゐる。勿論獨斷的な點も多々ある事と思ふが、史眼亦決して凡庸では無い。

さて、この文章は、作者が「源義朝」を書く爲めにその義朝遁走の路を實地に踏査した時の記録であるが、これを讀んでも、此の作者の最初の歴史小説がかりそめならぬ用意を以て書かれた事がわかると思ふ。「源義朝」が、書かれたのは、彼の關東大震災の翌年の大正十三年作者が五十四歳の時の事であつた。震災の爲めに多少の遷延を見た最初の「花袋全集」が完成し、一つにまとめられた長い間の文學的業績を顧みて、ほつと一息附く暇も無く、灰燼の中から再び立ちあがりつゝある東京の姿を見ながら、更に新生の勇氣を鼓舞して此の新しい試みに筆を着けたのであらう。非常な意氣込みだつたとは、家人の語るところである。最初は「名古屋新聞」に連載されたが、完結と同時に單行本となつた。本が出来た時、出版記念會が催されたが、その夜の作者は非常に上機嫌だつたと云ふ。

歴史小説を書いてゐると、時代おくれになるやうな気がすると、執筆中家人に漏らされたさうだが、併し、此の一篇に描かれたものは、決して單なる昔の物語では無い。義朝を描く事によつて、作者は矢張はつきりと作者自身を語つてゐるのだといふ事は、一讀して直に了解される。史上の人物を描いて、

その體臭をまで感じさせる程の切實な筆は、流石に大花袋である。先に何が待つてゐるとも知らずに、ひたすらに生の意慾に驅りたてられて突進して行く義朝の姿、その義朝の姿の中に、作者はあらゆる人間の姿を見てゐる。そして靜かな咏嘆を以てそれを廣い大きな胸に抱き取つてゐるのである。

聞くところによると、此篇を書くに當つて作者が一番苦心したのは、會話だといふ事である。あまり耳遠い言葉でなしに、時代の色を出さうとした苦心は、この篇ばかりで無く、作者の他の歴史小説にも見てとられる。作中の人物の中では、大夫進朝長にとりわけ愛情を寄せ、今は里人にも遺れ果てられてゐる朝長の墓前に立つて、滿眼の涙をそゝがれたことも聞く。

「平治物語」の世界から「平家物語」又は「源平盛衰記」の世界へと移り、「通盛の妻」を書いて、雜誌「婦人の友」に発表したのは、大正十五年、作者五十六歳の時である。平家没落の哀史を背景として平家第一の佳人小宰相の局の悲劇を描き出したものである。小宰相局に先立つて入水して果てた可憐の公子清經を配したのは、多分、作者の小説的空想であらうが、此の三角關係によつて戀愛心理は更に微妙なニュアンスを加へてゐる。

戀愛心理の解剖に、その興味と努力との大半を傾けたかに見える此の作者は、更に「道綱の母」によつて、その追従し難き境地を示した。道綱の母は「百人一首」に、「歎きつゝひとりねる夜のある間はいかにかに久しきものとかは知る」の歌で知られ、あの有名な「蜻蛉日記」の作者として知られてゐる人

である。これは、大正十四年五十五歳の時、矢張「婦人の友」に「愛と戀」といふ題で連載されたものである。材は勿論、「蜻蛉日記」から得たもので、これは、「女の一生」とも名づけたい作だ。そのあくる年の作「戀の殿堂」などを思はせる戀愛心理小説であるが、かういふものは、正に作者の獨壇場どくだんじやうと云つて宜からうと思ふ。

頁の都合で、他の卷に譲らなければならなくなつたが、作者には、以上三篇の外に尙ほ、左大臣頼長の死を描いた「流矢」、頼長の父忠實を描いた「秋の日影」の二篇がある。前者は中篇、後者は短篇であるが、いづれもすぐれたものである。

尙ほ、作者は、明治維新直後の士族の没落を描かうといふ意圖もあつた。又、材を支那の歴史にとつて、徽宗皇帝の末年を描かうとした意圖のあつた事は、筆者直接に作者から聽いてゐる。假すに齡を以てしたならば、歴史小説の方でも尙ほ多くの傑作を出された事と思ふ。

(終)

昭和十一年七月十日印刷
昭和十一年七月十五日發行

花袋全集第十二卷
豫約價金壹圓八拾錢

著作者 田山 錄 彌

東京市小石川區竹早町三十二番地

發行者 川 俣 馨 一

東京市本所區麻橋一丁目二十七番地ノ二

印刷者 井 上 源 之 丞

東京市小石川區竹早町三十二番地

(内外書籍株式會社内)

發行所 花袋全集刊行會

電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印場工分所本社會式株刷印版凸)



製複許不

エトJ-51





